

## 試験の内容及びその結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 英語学・英語教育学分野	氏名	赤塚麻里
試験担当者	主査 教授 廣瀬正宜 副査 教授 大岩昌子 副査 教授 佐藤一嘉 副査 関西大学 准教授 元吉忠寛		
<p><b>1. 試験の内容</b></p> <p>口述試験は、平成25年7月6日(土)午後1時より3時まで約2時間にわたり、本学5号館533セミナールームにて、行われた。まず、申請者が論文全体の概要と研究によって得られた知見を説明した。つぎに、各審査委員から論文の内容について質問、コメントが発せられ、申請者はひとつひとつ丁寧に、真摯に、的確に答え、必要に応じて説明を加えた。また、批判的なコメントに対しては自身の見解を述べ、委員と学術的な討論を行った。主な内容はつぎの通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 本調査では量的調査しかなされなかったが、学習者がどうとらえているかを示す質的調査も必要ではないかという審査委員の意見があった。これについては、今後、質的調査と文レベルでのプロソディ学習を研究課題とする。</li> <li>(2) 聴取テストと発音テストの間に相関が見られなかった点については、長期間の調査を行って再検証するべきである。この点も今後の研究課題とする。</li> <li>(3) 英語母語話者が英語のピッチの変化の描き取りができなかったのに対し、日本人学習者はできたのはなぜか、指示がうまくなされなかったのではないかと、あらかじめ練習をする必要があったのではないかという意見については、事前に描き取る練習をしなかった、また、ストレスアクセントの英語母語話者はピッチの変化について普段意識していないから書けなかったのではないかと、日本語はピッチアクセントなので、日本人はピッチの変化に敏感なのだと考えられるとのことであった。</li> <li>(4) 今はCALLなどパソコンを使った授業で英語プロソディーを学ぶ方法もあるのに、なぜ紙に描く方法を使ったのかということ、パソコンの普及が全国津々浦々の学校とは言い切れないこと、生徒各自が自由にパソコンを使うところまで普及していないこと、機材と電源がなければ使えないことなどを考えると、紙媒体の方が汎用性、使い勝手に優れていることなどがあるためである。</li> <li>(5) 今後、日本の英語教育を改善するために、英語教員に対して英語プロソディー表記法による教授法を含む英語発音教育の研修をする必要がある。</li> <li>(6) 論文に誤植が散見されるので、訂正の必要がある。</li> </ol> <p><b>2. 試験の結果</b></p> <p>口述試験を行うにあたって査読した論文の内容は、日本における従来の英語教育に不足していた英語プロソディーの学習について、その表記法と学習との関連を実験を通して明らかにしたもので、英語教員の研修も含め今後の日本における英語教育に取り入れられる可能性を大いに有するオリジナルな研究である。この論文をもとに、今後もさらに、デジタル教材も含め、英語プロソディーの研究を進め、学界に貢献することが期待される。</p> <p>口述試験を通して、論文申請者がこの分野の研究について、先行研究を含めてよく理解していること、学術研究および教育上の意義をよく考えていること、研究に真摯に取り組んでいることが確認された。今後もさらに研究を発展させる計画を持っていることもわかった。</p> <p>以上の結果から、審査委員会は、口述試験を通して、申請者が博士の学位にふさわしい十分な学識と研究能力を有することを認め、博士号を与えるにふさわしいと判定し、合格とした。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>			